

## Sabbath—その思想・歴史・意義 (2)

村上良夫

The Sabbath : Its Idea, History and Significance (2)

Yoshio Murakami

*Received October 29, 1990*

### I はじめに

### II Sabbathの思想—その由来と意味内容, 実際

- A. 十戒
- B. 創造物語
- C. Sabbathの諸側面
- D. Sabbath遵守の実際
  - ①旧約時代
  - ②中間時代
  - ③新約時代

(以上先号)

### III Sabbathの歴史的展開

- A. 初代教会時代
  - ①使徒時代
  - ②2 - 5世紀
- B. 中世
- C. 近代
  - ①宗教改革期のヨーロッパ大陸 (以上本号)
  - ②イギリスの宗教改革とピューリタニズム
  - ③新大陸アメリカ
- D. 現代

### IV Sabbathの現代的意義

---

\*教養部

Faculty of General Education

### Ⅲ Sabbathの歴史的展開

#### A. 初代教会時代

##### ① 使徒時代

聖書（旧約・新約）に述べられているSabbathは、第7日、すなわち、今普通に言う土曜日である。これは、ヘブライ語の安息日（シャバト、**שַׁבָּת**）に由来する語が、今も各国語の“土曜日”となっていることから明らかである（**σάββατον**, *sábado*, *sabato*, *sobota* 等々）<sup>1)</sup>。

ところが、現在、実際に世界中のキリスト教徒たちが仕事をやめて教会に行く日は、一般に日曜日である。聖書のSabbath（土曜安息日）が、いつ、なぜ、どのようにして日曜日になったのであろうか。

新約聖書にそのいきさつが述べられているであろうと当然考えるのだが、実はひとつも触れてはいないのである。Sabbathが土曜日から日曜日に変更された、といったようなことは、聖書には一切記されていない。

さまざまに解釈できるのが聖書の難しさでも面白さでもあるが、Sabbathのことに関しては、Sabbathの誤った理解の仕方や守り方について注意しているらしい箇所（コロサイ2：16など）はあるのだが、Sabbathが廃止されたとか日曜日に変更になったとかは、何一つ述べられていない。十戒の一つであり、ユダヤ教の中心的な柱とも見なされたSabbathの規定が、廃棄・変更されるようなことがあれば、たいへんな出来事であるから、新約聖書に詳細に説明されているはずなのに、そうしたことは全く触れられていないのである。

一方、日曜日はどうなのか。日曜日を特別な日とするというようなことが、新約聖書に書いてあるのか。これには実は、二つの見方がある。一切書いてないとする見方と、すでに新約聖書に、日曜日が特別な日であると定められているとする見方と。正反対の見方がなぜ生じるのか。結局は聖書の解釈からくるわけである。

聖書のどんな箇所の解釈が問題となるのか。最も頻繁に引用される三つの聖句を取り上げて、双方の見方を紹介してみよう<sup>2)</sup>。

a. コリント第一・16：1, 2. 「聖徒たちへの献金については、……一週の初めの日ごとに、あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じて手もとにたくわえておき……」。

「一週の初めの日ごとに」とあるのは、日曜日がすでに聖日とされていたことを示唆するものである、と見る立場が一方にあり、他方では、ここは教会に集まることなど何も言うてはいない、週の初めごとに、それぞれ、収入に応じて、手もとにたくわえておくようにと、つまり、定期的に、個人的に、収入に応じて手元に取り分けておくようにと、計画的な献金の仕方について実際的な助言を与えているにすぎない、と解する立場もある<sup>3)</sup>。

b. 使徒行伝20：7-12. 「週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、パウロは翌日出発することにしていたので、しきりに人々と語り合い、夜中まで語りつづけた」

(7節)。

これこそ、日曜日が聖日とされ集會が持たれていたことを示す最初の明白な証拠、とする注者は枚挙にいとまがない<sup>4)</sup>。「週の初めの日」は日曜日ではないか、「パンをさくために集まった」とは、聖餐式を行うために集まった、つまり教会での礼拝を指しているではないか、というのである。

他方では次のように反問される。これは明らかに夜の集會だが、土曜の夜だったのか日曜の夜だったのか、それさえ明確ではないではないか。「パンをさく」とは、本来、食事を始めるという一般的な意味を持っている。この場面は聖餐式というより、パウロを送るための送別会を兼ねた会食とみるほうが適當ではないか。のちに、ローマで、主だったユダヤ人たちに対して、「兄弟たちよ、わたしは、わが国民に対しても、あるいは先祖伝来の慣例に対しても、何一つそむく行為がなかったのに…」(行伝28:17)と断言しているパウロが、土曜日に代えて日曜日を聖日としていたとは到底考えられない、と見るのである。

c. ヨハネの黙示録1:10。「わたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような大きな声がするのを聞いた」。

この「主の日」(*κυριακή ἡμέρα*)という言い方こそ、日曜日を指す新しい呼称の、その最初の例にほかならない、これは、黙示録が書かれた1世紀末には、すでに日曜日が礼拝の日として知られていたことを示している、と結論づける論者が多い。

しかし他方、この「主の日」というギリシア語は、聖書の中でここにしか出てこない語であり、主要な解釈としても、①終末的な主の日、②土曜安息日、③復活祭、④日曜日、という4つもの見方が挙げられてきた。そして、確かに2世紀も終わりに近くなると、「主の日」は日曜日を指す呼び名としてはっきり登場してくるようになるのだが<sup>5)</sup>、しかし黙示録が書かれた1世紀末にすでに日曜日を“主の日”と呼ぶことが始まっていたのかどうか、黙示録の記者ヨハネは、この言い方でもって日曜日を指したのかどうか、これだけでは決定しえない。同時代の他の用例が見あらず、加えて、黙示録よりあとに書かれたと見られている「ヨハネによる福音書」にも、そうした言い方は全然出てこない。従って、後代の表現を100年近くもさかのぼらせて、この「主の日」は日曜日だと断定することは無理なのではないか、とする見方もあるのである。

以上見てきたように、新約聖書には、Sabbathが第七日(土曜日)から第一日(日曜日)に変わったという明白な記述は、一切ないというのが正確なところである。それでは、変化は、いつごろ、なぜ起きたのか。それを次にたどってみたい。

## ② 2-5世紀<sup>6)</sup>

### a. 安息日から日曜日へ—Bacchiocchiの見解

SabbathとSundayという問題に関しては、今のところ、S.Bacchiocchiの『安息日から日曜日へ—初期キリスト教における、日曜日遵守の起源の歴史的研究』(1977)<sup>7)</sup>が、最も新しく、かつ最も包括的とされる。

Bacchiocchiの論旨はこうである— 一般に日曜日はすでにキリストの時代に、もしくは使

徒たちの時代に始まったと考えられているようだが、聖書にはそうした記事は見いだせない。それどころか、エルサレムの教会には「律法に熱心な」ユダヤ人改宗者（行伝21：20）が多数存在し、「祭司たちも多数」（同6：7）加わっていたのだから、そのエルサレムの教会で安息日を変更するという大変革が行われたとは到底考えられない。それはむしろ、大部分異邦人キリスト者から成るローマの教会で起きたのではないか。ローマは、ユダヤ人に対する反感・警戒心が強く、ローマのキリスト教徒はユダヤ人との分離を明確にする必要に迫られていた。この根強い反ユダヤ主義を底流として、いちばん目立つるしである土曜安息日を変更することを意図するようになる。そして、ローマでも盛んだった太陽礼拝の祭日である日曜日を、土曜日に代わる安息日として採用したのではないか。そして、ローマ教会の持つ優位性・影響力によって、各地の教会に日曜日を普及させていったのではないか——こうしてBacchiocchiは、2世紀のローマにおいて、反ユダヤ主義と太陽礼拝を背景として、日曜日遵守が生じたとするのである。

原史料を広範に渉猟した精緻な論考であるが、この見解に対しても、種々の批判がある<sup>9)</sup>。特に、たとえば、日曜日がそれほど太陽礼拝の祭日として一般的であったとしたら、逆に、そうした異教の習慣を、2世紀のキリスト教徒たちは、はたして何の抵抗もなく受け入れたであろうか。激しい反発を引き起こしたと見るほうが、むしろ自然ではないであろうか。また、2世紀においては、ローマ教会の優位性など確立されてはおらず、十分な影響力を行使することなどできなかったのではないか。さらに、大事なことは、日曜日は、土曜日に代わるものとして作られたというより、土曜安息日と平行して、もう一つ別の、特別な日として生まれてきたと見るほうが正しいのではないか。すなわち、日曜日は、キリスト教徒の安息日というより、キリスト教徒の礼拝日と見なされたのではないか。実際、日曜日は最初、礼拝の日であった。日曜日が休みの日と見なされたという2世紀の記録はない<sup>9)</sup>。後に触れるが、コンスタンティヌス帝（4世紀）以降になってはじめて、休みの日となり、安息日的な色彩を帯びようになっていく<sup>10)</sup>。

このように、Bacchiocchiの見解は、いくつかの点でさらに検討を要すると思われるが、しかし、日曜日の起源はイエスや使徒たちにはないと思われること、ユダヤ教・異教・キリスト教の政治的社会的宗教的せめぎ合いの中で、反ユダヤの意識とからまりあいつつ、異邦人改宗者の多かったローマ教会で、日曜日が特別な日とされていったと見られること、等を明らかにした点で、大きな意義を持つと言えよう。

さらにもう一つ。一般に言われているような、キリストの復活を記念して日曜日に礼拝を持つようになったという説明が正しくないことを、Bacchiocchiは史料に沿って明らかにしている<sup>11)</sup>。最初期の史料（アレクサンドリアのバルナバ、ローマの殉教者ユスティノス）は、復活を日曜日遵守の第一の理由とはせず、むしろ創造の“第一日”，また“第八日”という点に重きを置く。光が創造された第一日（日曜日）は、第一の創造の、またキリストの復活による第二の創造の記念日であり、第一の創造の完成を記念するにすぎない第七日（土曜日）にまっさっている。また、創造週の7日間はこの世界を象徴し、次の日すなわち第八日と言える日曜日は、新しい永遠の世界の始まりを意味すると考えるのである。日曜日を“第八日”とするこの象徴的終末的な意味づけは、“8”という数字に特別な意味合いを見いだそうとする解釈（8日目の割礼、ノアの洪水の時に救いにあずかった8名、等々）と相まって、広く用いられた。しか

し、時代を経るにつれて“復活”を日曜日遵守の第一の理由とする傾向が強くなり、アウグスティヌス (354-430) ははっきり、「主の日は、ユダヤ人ではなく、主の復活のゆえに、キリスト者に告げられている。そしてこの〔復活という〕出来事に、その祝いの起源を持つのである」<sup>12)</sup>、「主の日は、復活信仰のゆえに、安息日に優先するものとなった」<sup>13)</sup>、と述べるに至るのである。このように、まず日曜日があってそれをさまざまに理由づけ正当化する中で、“復活”ということが主な根拠とされるようになっていく経緯を、Bacchiocchiは丹念に跡づけているのである。

#### b. 安息日と日曜日の並存

さて、Bacchiocchiの見解を参考にしつつ、それでは実際にどう考えたらよいのであろうか。SabbathとSundayという問題は、2世紀以降、具体的にどのような展開をたどったと見るべきであらうか。現在の段階では、K.A.Strandの見方<sup>14)</sup>が、最も妥当で納得のいくものであるように思われるので、主としてそれに依拠しつつ、2世紀から5世紀に至る全体的な流れをたどってみたい。

まずはっきりしていることは、キリスト教徒たちが日曜日ごとに礼拝を持っているという最も早い記録は、アレクサンドリアとローマに見いだすことができるという点である。

130年頃、アレクサンドリアのバルナバは、きわめて比喩的な論述の中でこう述べる——従来の安息日はもはや神に受け入れられるものではなく、神は「第八日を始まり、すなわち新しい世界の始まりとされた。それゆえにわれわれは、第八日〔日曜日〕を喜びをもって守るのである。この日はまた、イエスが死人の中からよみがえられた日でもある」<sup>15)</sup>。

さらに150年頃、ローマのユスティヌス (いわゆる殉教者ユスティヌス) は、『第一弁証論』の中で、日曜日の礼拝について詳しく述べている——「太陽の日と呼ばれる日には、町や田舎に住むすべての人々が1カ所に集まり、使徒たちの回顧録や預言者たちの書き物が、時間の許す限り朗読される。そして、朗読者がやめると司会者が口頭で教え、これらの善きことにならうようにと勧める。それからわれわれは一斉に立ち上がって祈りをささげ、……祈りが終わるとパンとブドウ酒と水が持ってこられ、司会者が同じように力を込めて祈りと感謝をささげる。人々はアーメンと唱えて同意を表す。……日曜日はわれわれが皆、一般の集会を持つ日であるが、これはその日が第一日であって、神がこの日に、闇と物質を変えて世界を造られたからである。またわれらの救い主イエス・キリストは、この同じ日に死人の中からよみがえられたからである。土星の日〔土曜日〕の前日に、人々はイエスを十字架につけたが、土星の日の翌日、日曜日に、イエスは使徒たちと弟子たちに現れたもうた……」<sup>16)</sup>。

ローマとアレクサンドリアではこのように、日曜日を礼拝の日として守るようになっていたことが明白にうかがえる。そして同時に、従来の安息日を、ユダヤ人のものとして排除しようとする傾向もうかがえるのである<sup>17)</sup>。

ところで、ここで大切なことは、ローマとアレクサンドリアではこうして土曜安息日の影が薄くなって日曜日が前面に出てくるのに対し、キリスト教世界の他のほとんどの地域では、日曜遵守は土曜遵守と並んで、つまり二つが並存する形で現れてくるということである。5世紀の教会史家ふたりの証言を聞こう——

「世界中のほとんどすべての教会は、聖なる秘儀〔聖餐式〕を毎週の安息日〔土曜日〕に執

り行うが、しかしアレクサンドリアとローマのキリスト教徒は、何か古い伝承のゆえに、これをやめてしまっている<sup>19)</sup> (ソークラテース・スコラスティコス。C.380-C.450)。

「コンスタンティノーブルの人々は、そしてほとんどどこでもそうなのであるが、週の第一日と同様、安息日にも共に集まる。しかしこの習慣は、ローマやアレクサンドリアでは守られていない<sup>19)</sup> (ソーズメノス。450年頃没)。

このように、5世紀に至っても、ほとんどすべてのキリスト教世界は土曜日と日曜日の両方を守っていたと推測できるのである。つまり、日曜日は土曜日にとって代わるものとはなりえていない。

もう少し見てみよう。4世紀後半に、おそらくシリアあたりでまとめられたと思われる教会法の集成『使徒教憲』は、日曜と土曜に関するいくつかの規定を記している。たとえば—

「安息日を守り、主の日を祝いなさい。前者は創造の記念であり、後者は復活の記念なのだから<sup>20)</sup>。

「奴隷たちをして5日の間働かせなさい。しかし安息日と主の日には、彼らが教会に行って信心の教えを受けることができるよう、休みを与えなさい。前に言ったとおり、安息日は創造のゆえであり、主の日は復活のゆえである<sup>20)</sup>。

4世紀末、カパドキアの三教父のひとり、ニュッサのグレゴリオス〔394年没〕は、安息日と日曜日を“姉妹”と呼び、同じ頃、アマシアのアステリオス〔410年頃没〕は、「安息日と主の日」という「これら二つの日が組になって共にやってくるのは」、キリスト教徒にとってすばらしいことであると述べている<sup>20)</sup>。

ここで少しまとめてみる。ローマやアレクサンドリア以外の、ほとんどのキリスト教世界では、4、5世紀に至るまで、土曜安息日と日曜日とが、共に守られていたと見られる。ローマやアレクサンドリアではなぜ土曜日が消えていったのか。おそらく、Bacchiocchiが指摘したような、一般的な反ユダヤ意識、またそれゆえにユダヤ人との分離の必要が、これらの大都市には存在したからであろう。しかし他の地域では、両方の日が守られ、ただしそれがしだいに日曜日に一本化していくようになる。なぜか？日曜日が安息日としての性格を帯びるようになっていくからである。そこを次に見てみよう。

### c. 日曜日の安息日化へ

Bacchiocchiがローマについて解明したような日曜日遵守の起源は、他の地域にはあてはまらないのではないかとStrandは見る。何世紀にもわたって、両方の日は並存しており、何よりも、日曜日が、仕事をやめる安息日としてではなく、礼拝の日として生まれてきたことは確かだと考えられるからである。そしてStrand自身は、日曜日の礼拝は復活節を祝うことから始まったのではないかと推測する。—キリストは死者たちの復活の「初穂」(コリント第一・15:20)と言われているが、旧約時代において初穂にささげるのは「安息日の翌日」(レビ記23:11)であった。この「安息日」を、小アジアの信徒たちは、過越節すなわちニサンの月の14日ととったが、他のほとんどの地方の信徒は、文字通りの土曜安息日ととり、その翌日すなわち、ニサンの月の14日以後の日曜日に、主の復活を祝うようになった。こうして毎年、復活の日曜日を祝うようになり、それがしだいに週ごとの日曜日に拡大されていったのではないかと

からこそ日曜日には、復活を祝い記念するという色彩が濃厚だったのではないか。—Strandは一つの仮説としてこうした見方を提示する<sup>29)</sup>。さらにJ.van Goudoeverは、復活節からペンテコステまでの7週間にわたって、日曜日は特別な意味を持ち、それがしだいに1年全体に拡大されたのかもしれないと示唆している<sup>29)</sup>。

いずれにせよ日曜日は、礼拝の日として始まり、休みの日である安息日と並存していたと見られる。しかし、その日曜日が、休みとしての性格を持つようになっていく。その突破口となったのが、コンスタンティヌス大帝の法令である。迫害を終わらせキリスト教を公認したコンスタンティヌスは、キリスト教に、ローマ帝国における新しい地位を与えただけでなく、日曜日に、市民の休日という地位を与えたと言える。

321年3月7日の、有名な日曜休業令はこう告げる—「尊ぶべき太陽の日には、都市に住む行政官と人民は休むべきであり、すべての作業場は閉じられるべきである。しかしながら、田舎においては、農業に従事する者たちは自由かつ合法的に、仕事を続けてよろしい。なぜなら、種まきやブドウの植え付けに最も適した日が日曜日にあたるということが、しばしば起こるからであり、そうした仕事にふさわしい機会をおろそかにすることによって天の恵みを失ってはならないからである」<sup>29)</sup>。

これが、日曜日遵守を規定する最初の布告となった。これが必ずしもキリスト教的方向づけを持つものでないことは、「尊ぶべき太陽の日」という言い方からも、また、十戒ではすべてのわざをやめるよう告げられている（出エジプト記20：8-11）にもかかわらず、農業にかかわる仕事を除外していることから明らかであろう。コンスタンティヌスの念頭にあったものが、ユダヤの安息日ではなくて、ローマの異教の祝祭日であったことは間違いない。そして、彼が、日曜日には休むよう命じたのは、この日に礼拝を持っていたキリスト教徒たちの便宜を図るという意味もあったであろうが、太陽礼拝という点からきていることも確かである<sup>29)</sup>。つまり、ここで確認しておきたいことは、Rordorfが指摘するとおり、「当初、国家による日曜立法は、キリスト教的背景を第一とするものではなかった。それはむしろ、政治的社会的理由によるものであった」ということである<sup>29)</sup>。異教徒たちはもちろんのこと、キリスト教徒にとっても特別な日となっていた日曜日を、国家的休日とすることによって、帝国内の時のサイクルと営みをコントロールしようとしたというのが、正確なところではあるまいか<sup>29)</sup>。

決定的な史料がない以上、コンスタンティヌス自身の意図を明らかにすることはできない。しかし、彼の動機が何であれ、確実に言えることは、この321年の法令が、日曜日の歴史においてまさしく画期的なものとなったということである。すなわち、この法令は、日曜を休みとすることに関して、これ以後続々と出てくる、公権力による法律の制定と、教会会議の布告という、一連の、二重の動きの、その原型となったのであった<sup>29)</sup>。

386年には、皇帝テオドシウス一世とヴァレンティアーヌス二世が、日曜日の制限規定を拡大して、この日には訴訟をやめることを命じ、また、公的であろうと私的であろうと、負債の支払いを禁止する<sup>30)</sup>。

425年、テオドシウス二世は、日曜日には劇場、サーカス等の娯楽を禁止し、神礼拝に専念するよう命じる<sup>30)</sup>。

さて、こうした、日曜日を休日とする立法措置に対して、キリスト教会側はどう反応したであろうか。日曜日の礼拝という点では、確かに日曜休学令は歓迎すべきものであったろうが、しかし不都合な面もあった。これまでは、礼拝出席を除いては、日曜日は仕事の日であったからである。それが休みの日となると、土曜・日曜と、続けて2日間仕事ができなくなってしまうことになる。とすれば、むしろ日曜日こそ真の安息日とするほうがよいのではないか、という傾向が出てくる。実際、4世紀後半、シリアの聖書解釈学者エフラム〔373年没〕は、「すべての日の長子たる主の日」こそあがめられるべきである、この日は「安息日から長子の権利を取り上げた」のであると説く。そして、日曜の休業は奴隷たちや動物たちにも適用される、と述べるのであるが、ここには明らかに、十戒の安息日を日曜日にあてはめようとする意図が見られる<sup>39)</sup>。

日曜日を休みの日とすることに関して取り扱った最初の教会会議は、364年頃のラオデキヤ会議とされている。そこでは、第16条で「土曜日には、福音書や聖書の他の箇所が朗読されるべきである。……」として、安息日に敬意を表しつつも、第29条でこう明記する——「キリスト教徒は、土曜日にはユダヤ教式に怠惰であってはならず、働くべきである。しかし主の日は、特にあがめるべきであって、キリスト教徒である以上、可能ならば、働くべきでない。もしユダヤ教的にしているならば、キリストから捨てられるであろう」<sup>39)</sup>。ここで注目すべきは、本来安息の日であった土曜日が、逆に仕事日とされていることである。休みの安息日（土曜日）と、礼拝の日曜日という、二つの特別な日があったが、国家と教会の両方から日曜日が休みの日と制定されて安息日のような正確を帯びようになり、他方では土曜日が安息日でなくなっていく。こうした大きな流れをわれわれはつかむことができるのである。

もう一つ付け加えておかねばならないことは、ローマの教会が早くから安息日を断食の日とし、それを他の地域の教会にも広めようとしたということである<sup>40)</sup>。Bacchiocchiの指摘するとおり、「安息日には断食せよという命令は、この日には聖餐式を執り行つてはならず教会の集會を聞いてもならないという命令と共に、ローマの教会がとった断固たる手段を示すものである。それは一方では、キリスト教徒を安息日を敬うことから引き離すためであり、他方では、日曜礼拝のみを高めるためであった」<sup>40)</sup>。

まとめておこう。2世紀から5世紀に至る時代、キリスト教世界全体としては、休みの安息日と礼拝の日曜日とが並存し、しかし徐々に、日曜日が礼拝と同時に休みの日ともなっていく。ローマ（とアレクサンドリア）では早くから、土曜安息日の遵守をやめて日曜日をキリスト教徒の安息日にしようとする動きが目立ち、国家の出す日曜休業令とも相まって、他の地域にも影響を及ぼしていく。これがこの時期におけるSabbathとSundayの状況である。

## B. 中世<sup>40)</sup>

西欧中世における安息日（土曜日）と主の日（日曜日）は、概略次のような展開をたどる——初期には両者が区別され並立していたのが、時と共に日曜日の安息日化が着実に進んでいく。すなわち、日曜日は十戒の第四条に則って遵守されるべきキリスト教の安息日となっていく、12世紀頃には、この日曜日の安息日化が一般的に定着したように見受けられる。続いて13世紀



には、その神学的理由づけがなされていく。—これが大ざっぱな流れである。

#### a. 主の日（日曜日）の安息日化の進行

先にも触れたように、初代教会においては、主の日（日曜日）は、労働を休む日ではなかった。ただ日曜日には、主の復活を記念し祝う礼拝を持ったというだけで、それも初めは早朝に、そして4世紀頃になってようやく、もっと遅い時間に、午前中に行われるようになる。日曜日は、この礼拝のあいだだけ仕事が中断したという、ただそれだけのことであった<sup>37)</sup>。ヒエロニムス〔347-419〕は、ベツレヘムの修道女たちは教会から帰ってからまた針仕事にとりかかる、と伝えている<sup>38)</sup>。あるいは有名な『ベネディクト会則』（540年頃）も、その第48条で、「日曜日には、種々の務めを割り当てられた者を除いて、全員が読書に時を費やすべきである。しかしながら、だれでも、余り怠慢であったり、怠惰であったりするために、読書をする意志または能力に欠けているような兄弟があれば、彼にできる範囲内の仕事を与えて、彼がむだに時間を過ごすことがないようにせよ<sup>39)</sup>と明記している。なお、言うまでもなく、「読書」はひまつぶしではなくして、手仕事にもまさる積極的な活動であった。つまり、こうした規定からも、たび重なる日曜休業令にもかかわらず、日曜日は、礼拝出席以外はほぼ普通に過ごす日であったらしいことが想像できるのである。

しかし、礼拝出席を奨励するために、教会は、ある種の労働を明確にとがめるようになる。538年のオルレアン教会会議では、主の日には、すきで耕したり、ブドウを剪定したり、垣根を造ったり、柱を立てたりすることは、しないように命じられる。それは「教会に出席して祈禱に加わる時間を持ちやすくするため」であった<sup>40)</sup>。

6世紀に登場した『天からの手紙』なるものが、主の日には完全に仕事から離れることを説いて、当時の人々に多大な影響を与える。この書は最初スペインあたりに現れたと思われるが、たちまち西方でも東方でも大きな反響を呼び起こした。一言で言えば、主の日を安息日化するのに大いに貢献するのである。

「主の日には家畜の乳をしぼるな。それより、貧しき者の世話をせよ。この日には、牛を働かせてはならないし、髪を洗ったり、切ったりしてもならない。……主の日を守ことに忠実であれ。主の日には庭の野菜を採ってもならない……」<sup>41)</sup>。この書は、主の日は宗教的目的のために聖別されていると説く。教会に行き、病人を訪問し、悩む者を慰めたりすべきだとする。そして、この日を守らぬ者には災いを宣告するのである<sup>42)</sup>。

日曜日が、十戒の第四条に則って守べきキリスト教徒の安息日となっていくこの傾向は、585年の第二マコン教会会議で顕著になる。そこでは、旧約聖書を根拠として、主の日には完全に仕事をやめるよう強く訴えたのである<sup>43)</sup>。

589年のナルボンヌ教会会議では、これがさらに徹底する。「すべての者は——子どもであろうと奴隷であろうと、ゴート人やローマ人、シリア人やギリシア人やユダヤ人であろうと——主の日にはすべての仕事をやめなくてはならない」。そして、もし違反を見つげられた場合、自由人は6ソリドゥスの罰金、奴隷は百叩きの罰を受けるとされ、かくて日曜日破りは罰せられるべき違反行為となった<sup>44)</sup>。

教会側のこうした日曜日遵守の働きかけに対して、国家側からの支持が伴う。マコン会議の時はGunthram王の勅令が、ナルボンヌ会議の時はChildebert二世の法令が、直ちに出て、教

会側をバックアップする<sup>45)</sup>。大陸だけでなく、イギリスにおいても、教会と国家、教権と俗権は手を携えて日曜日遵守を推し進めていくのである<sup>46)</sup>。

教会側、国家側の布告や法令と共に、日曜日遵守に関して民衆に大きな影響を与えたのは“奇跡物語”であった。日曜日を守らないとどんな目に会うか、どういう不思議な罰が下されるかが盛んに宣伝され、流布された。たとえば、こうした話を伝えているトゥールのグレゴリウス(538-594)によれば、リムザンでは日曜日に畑で働いていた大勢の人々が火で焼き尽くされた、ある男が日曜日に鋤で掘り起こそうとしたら鋤の柄に手がくっついてとれなくなった、粉を碾いた男は粉碾き器の取っ手が手にくっついてしまった、ブルジュでは日曜日に畑を柵で囲もうとしていた男が不具になってしまった、等々の話が広く語られていたという<sup>47)</sup>。こうした物語によって、日曜日の神聖さが民衆に印象づけられたわけである。

#### b. 日曜日が安息日にとって代わる

教会会議の教令、国家側からの法令、そして民衆レベルでの奇跡物語——こうした中で“主の日”は、しだいに“安息日”と同一視されるようになっていく。789年の法令で、シャルルマーニュはこう述べる——「われわれは、主が律法の中で命じられたことに従って、主の日には筋肉労働〔opus servile〕をせぬよう、また……ブドウの栽培であれ畑の掘り起こしであれ、農作業はせぬよう命ずる」<sup>48)</sup>。「律法」が引き合いに出され、また、かつてコンスタンティヌスが例外として免除していた農作業も、明確に禁止されている。まさに、日曜日と安息日の同一視がここには見られ、しかもこれが主流となっていく。<sup>49)</sup>

日曜日を、安息日のように日没から日没まで守らせるべく、働きかけがなされるようになり、8世紀末のフリウル教会会議では、主の日は夕暮から始まると明記され<sup>50)</sup>、9世紀半ばのルアン教会会議では、主の日は日没から日没まで守らるべしと明言される。<sup>51)</sup> まさに、安息日が土曜日から日曜日に、そのまま移されたと言えよう。この頃の雰囲気伝える好例として、最も偉大な神学者のひとりとして評されたフラバーヌス・マウルス〔856年没〕の説教の一部を引いておく——「主の日を守り、これを聖なる日としようではないか。かつて律法をお与えになったかたが、安息日について命じられたように、『夕べから夕べまで、汝安息日を守るべし』。それゆえ、われわれの休みがむなしなものとならぬよう、土曜日の夕より日曜日の夕まで、畑仕事からもすべての仕事からも離れて、神を礼拝することに専念しようではないか」<sup>52)</sup>

日曜日の安息日化が、こうして進んでいく。もちろん事はそう単純ではなく、たとえば、Glazebrookが指摘するとおり、<sup>53)</sup>

829年—パリ教会会議（日曜日の耕作、売買、訴訟禁止を再確認）

853年—ローマ教会会議（売買や畑仕事の禁止）

1009年—ヘクシャム教会会議（売買、市、狩り、日常労働の禁止）

1031年—ブルジュ教会会議（緊急や慈善の場合を除き、旅行の禁止）

1050年—コヤク教会会議（一切の“筋肉労働”と一切の旅行を禁止）

と、次々と、繰り返して教会は日曜日遵守を命じているのであるが、これは裏を返せば、それがなかなか実行されていない、十分徹底していないということの証拠ともなるわけである。

そうした紆余曲折を経ながらも、しかし日曜日は限りなく“安息日”に近づいていく。主の日（日曜日）のことを“キリスト教徒の安息日”と呼ぶ言い方が最初に現れるのは12世紀であ

るが<sup>54)</sup>、これはまさに、安息日が土曜日から日曜日に移ったことを示している。そして、実際、安息日の戒めをキリスト教徒の第一日遵守に定義通りに適用した最初の聖書学者は、12世紀後半、「歴史の師」と呼ばれて高い尊敬を受けていたペトルス・コメストル〔1179年没〕であろうとされている<sup>55)</sup>。すなわち12世紀には、日曜日ははっきりと土曜日に代わって安息日となっていたと見られるのである。移行はすんだ。あとはその神学的正当化が残っている。

日曜日を安息日とすることは、聖書的神学的にどのように根拠づけることができるのか。主の復活を記念し祝うという伝統を基盤とし、教会の命令、為政者による法令、そして奇跡物語等によって休日とされ神聖化され、聖書の安息日にとって代わるものとなったわけであるが、聖書の安息日と聖書には触れられていないこの日曜日と、どう結びつけて説明できるのか。それが13世紀の神学者たちの大きな課題となる<sup>56)</sup>。ここで二つの観点が導入される。ひとつは、安息日の戒めの中に、道徳的側面と儀式的側面とを区別すること。もう一つは、自然法の考えを取り入れること。この二つである。この二つを踏まえつつ、日曜日遵守の神学的正当化を完成させたのが、スコラ哲学の代表者トマス・アクィナス〔1274年没〕であった。

アクィナスは『神学大全』の中でこう主張する——「安息日を聖く守るべしという戒めは、一部道徳的であり、一部儀式的である。人間は神の事柄に集中するための時間を取り分けておく必要がある、という点では道徳的であるが、……しかし、創造を指し示すために特定の時が定められている、という点では儀式的である」<sup>57)</sup>。

つまり、こういうことである。聖書の律法には道徳的律法（道徳律）と儀式的律法（礼典律）とがある。道徳律は自然法に通ずる普遍的なものである。儀式的律法の方は、ユダヤ人に与えられた、特定の状況的なものである。さて、安息日の戒めには、この両方が含まれている。神を礼拝するために一定の時を取り分けよというのは道徳律であって、自然の理にかなった普遍的なものである。しかしその一定の時を、天地創造を記念して第七日とするというのは、ユダヤ的儀式的なものにすぎない……。

これが主の日の理由づけの基本線となる。そしてアクィナスはこう付け加える。「新しき法においては、日曜日の遵守が安息日の遵守にとって代わる。律法の規定によってではなく、教会の決定とキリスト者たちの習慣によって」<sup>58)</sup>。聖書の規定ではなく、信徒の習慣を踏まえつつ教会の権威によって、土曜日から日曜日に安息日に移したと告げるのである。

### c. 土曜安息日遵守者の存在

中世を終えるにあたって付け加えておきたいことは、中世を通じて、聖書が言う第七日安息日とその通り守る人々が、常にどこかに存在したらしいということである。最も早くから土曜日に代えて日曜日を聖日として推し進めてきたはずのローマでさえ、7世紀初めになってもまだ土曜安息日を守る人々がいたことは、グレゴリウス大教皇〔604年没〕の書簡からもうかがえる——「聞くところによれば、強情な精神をもった者たちが、われわれの信仰とは全く相反する卑しむべき教理をあなたがたの間で広め、安息日〔土曜日〕にはすべての働きをやめねばならないと教えているという。この者たちを、反キリストの説教者と呼ぶ以外何と呼べようか。現れて、すべての者に安息日と日曜日を守らせようとする者は、反キリストにはかならないではないか」<sup>59)</sup>。

教会分裂の頃（11世紀半ば）にも、東方教会では土曜安息日が依然として守られていた<sup>60)</sup>。

さらに、史料が乏しいために詳細は不明であるが、中世の後期・末期に至っても、第七日つまり土曜安息日を遵守する人々がいたようである。中には極端なグループもいたらしく、12, 3世紀北イタリアのパッサリア派と呼ばれる異端的宗派は、新約聖書だけでなく旧約聖書もきわめて重視し、従ってモーセの律法を遵守しようと努めて、安息日、清い食物と汚れた食物の区別、はては割礼まで行う者もあったと伝えられる<sup>61)</sup>。こうしたいささかエキセントリックな例は別として、14, 5世紀の北フランス、ボヘミア、イギリス、スカンジナビア等に、土曜安息日を守る少数者たちがいたと見られている<sup>62)</sup>。ユダヤ人の影響を受けた場合もあったであろうし、聖書の教えを単純に実践しただけという場合もあったであろうが、いずれにしろ第七日安息日が完全に消し去られることはなかったらしいということだけは確かである。

### C. 近代

#### ① 宗教改革期のヨーロッパ大陸<sup>63)</sup>

宗教改革者たちはSabbathとSundayの問題にどのような態度をとったであろうか。簡単に言えば、ルターやカルヴァンら主な改革者たちは、中世以来の厳格な聖日遵守主義というものを否定する。律法主義的なものを廃し、信仰による義にこそ重きを置くからである。にもかかわらず、新たな聖日遵守主義がプロテスタント陣営内にも広がり、しかもそれは特にイギリスにおいて著しく、いわゆるPuritan Sabbathと呼ばれるものを生み出す。そしてそれが新大陸アメリカで甚大な影響を及ぼすことになるのである。

イギリスのことは次項で取り扱うこととし、ここではヨーロッパ大陸内の動きを概観する。特に、これまでほとんど顧みられなかったスイスでの公開討論や、再洗礼派の中の特殊なグループを、少し詳しく紹介してみたい。

##### a. ルター、カルヴァンら

ルターとカルヴァンは、主の日（日曜日）は旧約の“安息日”ではない、という点では一致している。すなわち、旧約の安息日は廃された、しかし人間の必要に応じるために主の日が定められた、と見るのである。従って、中世後期のカトリック教会による、主の日と安息日の同一視は認めず、厳格な聖日遵守主義にも反対する<sup>64)</sup>。

代表的な著作から、それぞれの基本的な見解を見てみたい。

ルター：ルターが自ら自分の「真正な書物」と呼んだとされる『大教理問答書』（1529）の中には、十戒の「安息日の戒め」についてこう説き明かされている――

「この戒めは、その外的な休息に関するかぎり、ユダヤ人だけに設けられたものであって、荒い仕事から離れて休息し、人も家畜も元気を回復し、絶えまない労働によって衰弱しないように命じたものである。それゆえに表面的な意味では、この戒めは私たちキリスト者には何の関係もない。それは特殊な習慣、人物、時代、場所に結びついた旧約聖書の他のもろもろの律法と同じく、全く外的な事がらであり、しかも、それらは今やいっさいキリストによって解放されているからである」。にもかかわらず「私たちが安息日を守るのは、…まず第一に、まる一週間労働や生業に従事している一般人、下男、下女が、せめて一日だけはしりぞいて休養し、元気を回復するようにとの自然の教えと要

求とに基づく肉体的理由ならびに必要なため」,「次には、そしてこれがいちばん大切な目的なのだが、こうした休息日に、礼拝を守るべき場所と時とを定めて、集まり会し、神の御言をきき、御言について語り、神をほめ、歌い、祈りをささげるためである…。

けれどもこのようなことは、ユダヤ人の場合のように時間に縛られて、この日でなければならないとか、あの日でなければいけないとかいうべきものではない。いずれの日にしてもそれ自身としては、他の日に比べてまさっているということはない。こうしたことは日ごとにおこなわれてよいはずである。けれども民衆はそれを守ることができないので、一週のうち少なくとも一日をそのために選びのける必要がある。ところが、昔から日曜日がそのために定められているのであるから、やはりそのならわしはそのままにして、しきたりどおりに行ない、だれでも無用な改革によって混乱をひきおこさないようにしなければならない<sup>65)</sup>。

引用が長くなったがもう一つだけ、ルター自身の著作ではないが、ルター派の信仰告白である『アウグスブルク信仰告白』(1530年)を参考までに引いておきたい—「福音が明らかにされて以後モーセの儀式はすべて除かれてよいと教える聖書は、安息日を廃止したのである。しかし人々がいつ集まるべきか分かるよう、一定の日を定めることが必要であったため、教会はそのために主の日を定めたと思われる…」<sup>66)</sup>。

カルヴァン：主著『キリスト教綱要』の最終版(1559)、第2篇第8章28-34に「第四戒」について論じられている。「(この第四戒は)キリストの来臨によって、その他の象徴類といっしょに廃止になった、外的な、日についての遵守を含む」。つまり、7日目の遵守という面については、すでに無効になったが、しかし「安息日」はそうした外的儀式的な側面だけでなく、きわめて重要なもう一つの側面を持っている。それをカルヴァンは3つに分ける—

「まず、天上の立法者は『第七日の休み』という形でイスラエルの民に霊的な安息を象徴しようとしたもうた。それは、信仰者が、自らのうちに神を働かせたてまつるために、自分自身のわざをやめなければならないということである。第二に、神は、律法を聞き、儀式を行うために、かれらが集合するように、あるいは少なくとも神の御わざを冥想するためにとくに捧げるように、一定の日が定められることを欲したもうた。こうして、この日をおぼえて、かれらが敬虔へと訓練されるようにされたのである。第三に、神はしもべたちや、他人の支配のもとに生活するものたちに休みの日を与え、労苦からのいくらかの免除を得させようとしたもうたのである」<sup>67)</sup>。

この3点を、カルヴァン自身、『ジュネーブ教会信仰問答』(1545年)の中で、「霊的な安息を象徴するため。教会の制度上の秩序を保つため。隷属しているしもべたちを解放するため」と要約している<sup>68)</sup>。

すなわち、第四戒には外的儀式的側面と道徳的側面があり、前者は廃止されたが後者(前述の3点)はいつの時代にも適用されるというのである。「主キリストの来臨によって、このいましめの儀式的な部分が廃止になったことは疑いない。かれこそは『真理』でいまし、かれの臨みだもうところでは、すべての『象徴』は消えうせるからである。かれは『本体』であって、その現れたもうとき、『かげ』はしりぞくのである。かれこそは—わたしはいう—安息日の真の完成でいましもう<sup>69)</sup>。かくて安息日は廃止され、それとは別に主の日が設けられた。「迷信を一掃するに適切であったのでユダヤ人の宗教的な日は取り去られ、しかし、教会における品位と秩序と、平和を保つために、別の日がこの用にあてて定められる必要があったから

である』<sup>70)</sup>。

ルターもカルヴァンも、安息日と主の日は別のものと見る。旧約の儀式としての安息日は廃された。しかし人間のさまざまな必要に応ずるために、主の日が設けられた、と見るのである。しかし彼らの周辺には、これとは違う考え方をする改革者たちもいた。たとえば、かつてルターの同僚であったアンドレーアス・カールシュタット〔1541年没〕は、日曜日は“人間の作ったもの”だと述べ<sup>71)</sup>、これに対してルターは、そんなことを言うなら「土曜日が祝われることにならねばならない…」。それは「私たちをユダヤ人にする事になり、その結果、私たちもまた割礼などをわが身に施さねばならないことになる』<sup>72)</sup>と、激しく批判している。一方、ストラスブルクの宗教改革者マルティーン・ブツァー〔1551年没〕は、厳格な聖日遵守主義を主張し、市当局に働きかけて、聖日遵守違反者には重い罰金を課するようにさせたほどであった<sup>73)</sup>。日曜日を安息日と同一視し、政治権力をもって厳格な遵守を強制しようとした点で、イギリスの Puritan Sabbatarianism にきわめて近いと言える。大陸の宗教改革の中には、すでにこうした動きも含まれていたのである。

#### b. スイスにおける公開討論<sup>74)</sup>

ジュネーブを中心とするフランス語圏スイスで、プロテスタンティズムが勝利を収める前に、何度かにわたって一種の“公開討論会”が行われたことが知られている。そして、興味深いことに、SabbathとSundayの問題が、カトリックとプロテスタントの重要な論争点の一つとなっているのである。これまでほとんど注目されてこなかったこの点について、Daniel Augsburggerがまとまった形で取り上げているので、それを紹介してみたい。

まず、1534年のジュネーブ。前年暮れに始まったこの討論会<sup>75)</sup>には、カトリック側からはドミニコ会士にしてソルボンヌの博士、ギー・フルビティが登場し、ギヨーム・フェレルを中心とする改革者側と論戦を繰り広げた。「教会が聖書に含まれていない事柄を守らせようとするのは正しいことか」ということ、つまり、教会と聖書とどちらが上か、どちらが最終権威なのか、ということが中心テーマであったが、議論の中で、プロテスタント側が、人間が教会の中にかなる儀式も持ち込むべきでないことは明らかだと主張したのに対し、フルビティはこう答えたのである<sup>76)</sup>—「聖ペテロと教会は、たとい神が命じておられなくても守らるべき儀式を定める権威を持つということ、そしてまた、神の戒めを変えることができるということ、疑問の余地なく証明してお見せしよう」。神はユダヤ人に、今なお彼らが行っているとおり、土曜日を守るようにとお命じになった。「しかるに教会は、与えられた権能により、土曜日を主の復活のゆえに日曜日に変えたのである。われわれが日曜日を祝うのは、教会の命令と法のゆえであって、神の戒めのゆえではない。なぜなら、もし神の戒めに文字通り従うなら、土曜日に休まねばならないからである」。儀式を定める権限が教会にないというなら、日曜日を守ることは間違っていることになってしまうではないか。

プロテスタント側はこれに対して、すべての日は等しく神聖なのであって、われわれは日曜日に休んで神の言葉を聞き、また隣人たちに休みを与えるのである、と弁明する。

しかしフルビティはさらに追及する。7日のうち1日を守ればいいと言うのなら、1週のど

の日に休んでもよいことになり、大混乱を招くことになる。聖書は、反駁の余地なく、特定の日すなわち土曜日を守るよう命じている。日曜日を守るのは、全く教会の権威に基づくものである。

プロテスタント側は答える。神は教会の中に一致があるよう望まれるので、個々人が思い思いに休むことは禁じられている。また、キリスト者は、日を守るというより、愛のゆえに集まるというほうが正しい。……

ここで鐘が鳴り、討論は中断して翌日に持ち越され、しかし翌日はまた新たな題目が論じられたのであった。

次に、翌1535年の5月から6月にわたって、再びジュネーブで公開討論会が持たれた。カトリック側は、ピエール・カロリとジャン・シャピユイ。プロテスタント側はファレル、ピエール・ヴィレー、そしてジャック・ベルナル。残念ながら全体的な記録は残っておらず、ファレルの摘要<sup>70</sup>などから推測するしかないのだが、ベルナルの提出した五つの提題の第二番目は、教会は純粋な神の言葉によって治められるべきである、というものであった。そしてこれが討論のかなり大きな部分を占めたと見られる。

さて、プロテスタント側が、人はイエスが命じられた以外のことを命じてはならないと主張したのに対し、再び日曜日の問題がむし返される。プロテスタント側は前回と同様、日曜日を守るのはそれが特別な日だからというわけではない、キリスト者にとってはどの日も同じなのだから。ただ、公共の礼拝の便宜のために、また、すべての者に休みを保障するために、この日が守られるのである、と述べる。

彼らのこうした弁明から、カトリック側が前回と同様、お前たちは聖書に根拠を持たない宗教儀式〔日曜日〕を守っていると、プロテスタント側に認めさせようとしたらしいことが想像できる。プロテスタント側は、7日目に休むべしという命令は自然法の命ずるところであり、従って神の命令であるとして、日曜日を守ることを正当化しようとしたらしいが、しかしいずれにしても、聖書のみ (sola scriptura) を標榜する彼らにしては歯切れが悪く、余り説得力を持ちえなかったのではなかろうか。

更に1536年10月、今度はローザンヌで同様の討論会が開かれた<sup>71</sup>。ファレルやヴィレーらに対し、ドミニコ会士、モンブゾンのドミニクが立ち、いきなり核心を衝く——教会は聖書より前からあり、聖書の上にある、それゆえ聖書は教会によって承認されないかぎり何の権威もない、と。ヴィレーは激しく論駁する——教会は信徒が集まってできるものであるから、信徒は教会に先立つと言える、そして信徒を作るのは聖書であるから、聖書こそすべてに先立つものである、と。

ところが、ここでドミニクは、次のような挑戦の言葉を放つ——「もしも、教会には何の権威もなく、聖書を越えて、また聖書以外の、いかなる儀式も定めることができないと言うなら、なぜあなたがたは、神がモーセを通して命じられたところの安息日ではなくて、日曜日を守るのか。もしあなたがたが、聖書に変更を加えることを拒み、字句通りに守らねばならないと言うのなら、ユダヤ人のように安息日を守るべきではないか」。このように、教会が、聖書の権威によらないでも、それ自身の権威によって安息日を日曜日に変える権能を有しているとするなら、他の規則や儀式を定めることもできるはずではないか。従って、教会が聖書の上にあるということは明らかであろう。ドミニクはこう結論づける。

ヴィレーが反論を試みる。日曜遵守は単に教会が定めたことではなく、聖書の根拠を持つ。キリスト者が守るのはヘブル書4章に述べられている安息日、すなわち霊的の休みなのである。肉体的な休みに関して神が命じられたものは、第七日に休むべしということであった。ゆえにキリスト者は第七日目として日曜日に休むのである……。

ヴィレーはこのように、霊的に守ることのほうが定義通り守ることよりも重要であると主張し、さらに、実際的な配慮（共に集まる時を設ける、労働者らに休みを与える）のゆえに、律法の言葉に完全には合致していない習慣も正当化される、と論じるのである。しかし、Augsburgerも指摘するとおり、“聖書のみ”のプロテスタントとしては一貫性を欠くという印象は否めなかったであろう。

以上、フランス語圏スイスで行われた3回の討論会を見てきた。これらからわかることは、他の問題では舌鋒鋭い改革者たちが、こと日曜日遵守のこととなると矛先がにぶり、逆に受け身にまわって弁明に終始しているということである。なぜか。おそらくは、日曜日遵守には結局のところ明確な聖書の根拠が見いだせない、ということに尽きるであろう。福音の再発見が叫ばれ、“聖書のみ”のスローガンが高らかに鳴り響いた宗教改革期の、これは興味深い一場面であった。

### c. 再洗礼派とSabbath

次に、いわゆる“宗教改革急進派”などと呼ばれるグループの中の、特に“再洗礼派”に注目してみたい。初代教会への復帰を唱え、単純に聖書の言葉に従おうとした彼らのうち、大部分の者は従来通り日曜日を礼拝日としたが、中には、第七日、土曜日を守った者たちもいた。

この土曜安息日再洗礼派(Sabbatarian Anabaptists)についての研究は、Gerhard F. Haselによってなされているので、以下それに沿って見てみよう<sup>79)</sup>。

Haselは、これまでに明らかになった史料——カトリック側からの、プロテスタント側からの、そして再洗礼派自身による——を逐一検討し、土曜安息日再洗礼派が誕生したのは1527年ないし1528年頃、場所はモラヴィアのニコルスブルクであろうと推測している<sup>80)</sup>。このグループの中心的な指導者はOswald Glait。ルター派の牧師であったが、バルターザル・フープマイアー(1528年没)によって再洗礼派に転向した人物である。彼はAndreas Fischerを協力者としながら教を説き、かなりの成功を治める。実際、各地の当局者たちが神経をとがらすほどの影響を及ぼし、信奉者たちはニコルスブルク、アウステルリッツ、ボヘミヤのファルケナウやヤムニッツ、そしてシュレジエンのリーグニッツなどにも広がったとみられる。

Glait自身はウィーンでの1年間の牢獄生活の後、1546年、人目を避けて深夜に市外に連れ出され、ドナウ川で溺死させられたと伝えられているが<sup>81)</sup>、それでは彼が信じ伝えたその教えは、どのようなものであったろうか。Glaitの著書『安息日の書』(Buchlenn vom Sabbath)(1530年頃)は残っていないが、彼の論敵であったカスパル・フォン・シュヴェンクフェルト[1561年没。ドイツの宗教改革者]がGlaitの書を批判した文書が残っており、それによってSabbathに関するGlaitの主張を知ることができる<sup>82)</sup>。

GlaitはSabbathに関する自分の論拠を、単純に“聖書”の權威に、そしてその定義通りの解釈に置く。彼は、旧約聖書とその律法が今なお有効であることを信じ、ただ「祭司制度に関



する部分のみが影であって、……新約聖書が証言しているようにキリストにあって終わった」と確信していた。シュヴェンクフェルトが伝えるところをそのまま引用すると、「Oswald [Glait] の最も強力な論拠は、十戒の数ということである。……神が与えたもうたのは8つでも9つでもなく、10の戒めであって、すべての者がそれを守るよう神は望んでおられる、それは不変であると彼は言うのである。……それゆえに、安息日もまた守られねばならないし、もしそれを否定するなら、他の9つの戒めもすべて否定されなくてはならないと、彼は説くのである」。

十戒の有効性は、「キリストも彼の使徒たちも、それを変えようとしなかったし、廃止もしなかった」ということから明らかである、キリストは「決して安息日を破られなかったし、廃されもしなかった。そうではなくて、彼は安息日を確立し、それを堅く立て、数々の奇跡をもって飾られたのである」。さらに、使徒たちも安息日を守った、割礼を否定したパウロでさえ。——Glaitはこう主張する<sup>89)</sup>。

Glaitは、安息日は儀式的律法であって割礼と共に廃されたとする論敵たちの批判にくみすることはできない。割礼はアブラハムに始まるが、安息日はユダヤ人たちが存在するはるか以前からあるのであるから。「Oswald [Glait] は、安息日は創造の初めから命じられ守られたと主張する」<sup>90)</sup>。さらにGlaitは、ヘブル書4章から、安息日は「永遠の安息日の影、しるし」であって、このしるしは「キリストの再臨の時に成就する」ものと見なす。またGlaitは、安息日は生涯にわたって日々守らるべきものとして安息日の霊的遵守を説くシュヴェンクフェルトに反対して、定義通りの遵守を強調する、「牛もろばも守らねばならないとされているが、彼らには霊的に守ることなどできるであろうか」<sup>91)</sup>、それゆえ定義通りに守るのが妥当ではないかと言うのである。なお、日曜日については短い言及があるのみで、「日曜日は法王が作ったものであって」、安息日がなくなってしまったのは「悪魔のしわざ」だとGlaitは決めつけている<sup>92)</sup>。

さて、もうひとりの代表的Sabbatarian Anabaptist, Andreas Fischerに移りたい。Fischerは1480年頃、今日のスロヴァキアのクレムニツに生まれ、司祭であったらしい。論争相手たちは、彼は学識があってギリシア、ヘブライ、ラテンの諸語に通じていると報告している。再洗礼派になった彼は、1527年ないし28年にニコルスブルクに現れ、Glaitの土曜安息日を受け入れ、その協力者となる。スロヴァキアのSchwedler等で精力的な働きをするが、1529年Leutshauで妻と共に捕らえられ、Tschitschwa城に幽閉される。異端的教説と当局に対する反逆煽動のゆえをもって死刑を宣告される。妻は溺死刑、そして彼は絞首刑。妻は死ぬが彼は縄が切れて下に落ち、そのまま逃走する。再びモラヴィア、スロヴァキアの各地で活動するが、1540年、強盗騎士フランツ・ベベックの兵士たちに捕まり、Horka城の城壁から投げ落とされて、その波乱に富んだ一生を終えた。

Sabbathに関するFischerの考えは、彼の論争相手Valentine Crautwaldの文書を通して知ることができる。前述のGlaitの書物Buchlenn vom Sabbathに対してCrautwaldは批判を書き、それに対して反論してほしいとGlaitから依頼されてFischerは一書を著す。これに対し再度Crautwaldが書いた論述が残存しており、これによってFischerの主張がつかめるのである<sup>93)</sup>。

CrautwaldはFischerの主張として16の項目を挙げ、ひとつひとつについて論難していくのであるが、それによれば、Fischerの主張はGlaitのそれと基本的に重なり合っている。たとえ

ば

「1. 神の十戒は10の契約の言葉であって、安息日もその中で定められその中に含まれている。安息日が守られないなら、人は神の戒めを犯すことになり、8つ〔sic〕の契約しか残らぬことになってしまう」<sup>98)</sup>。すなわち、十戒の全体性というか、全部そろってはじめて完全な十戒と言えるはずだとFischerも強調するのである。

「2. モーセも、預言者たちも、新約聖書の中の教師である使徒たちも、皆、十戒を教えている。そして安息日もその十戒に属しているのであるから、人は安息日を守るべきである」<sup>99)</sup>。こういう調子でFischerはSabbath遵守の理由を挙げていくのだが、特に興味深いのは11項と14項である。

「11. 聖書は安息日について非常にたびたび語っている。安息日についてと同じように日曜日についての聖句がたくさんあるのなら、私は安息日の代わりに日曜日を守るのだが」<sup>100)</sup>。土曜安息日についての聖書の頻繁な言及と、日曜日についての聖書的根拠の薄弱さとを比較しているわけである。

「14. 教皇ヴィクトルとコンスタンティヌス帝が日曜日を守るよう命じた最初の人々であって、それは教皇教令としてもだされている。しかし神は、〔土曜〕安息日を制定され、命じられた」<sup>101)</sup>。人と神とが対比され、教皇と皇帝が日曜日を定め、神は安息日を定めた、とする。

以上、Sabbatarian Anabaptistsの代表者、GlaitとFischerを簡単に見てきた。はっきり言える一つのこと、彼らは自分たちの主張の根拠を、宗教改革の中心原則であった“聖書のみ”に置いているということである。これが彼らの主張を説得力あるものとし、それゆえにまた、種々の困難な状況下にあってもかなりの成功を収めさせたのではあるまいか。

#### d. その他<sup>92)</sup>

スペインにおいて、ルター主義の影響というより、独自に改革主義を打ち出した人物にConstantino Ponce de la Fuente〔1560年没〕がいる。説教者として名声を博し、著述家としても活躍し、しかしついに異端の嫌疑で捕らえられ獄死する。このConstantinoは十戒を強調し、しかも土曜日を守ることは十戒に従う一部分をなすと指摘する。「神は、〔いわば〕什一として神にささげられるべき定まった一日を指定された。この日には、他の思い煩いにじゃまされることなく、人は外的にも内的にも神を覚えて、感謝をささげねばならない——人を創造し、この世において支え、大いなる永遠の恵みを約束しておられる神に」<sup>102)</sup>。

トランシルヴァニアでは16世紀末、Andreas Eössiが自分で聖書を学んで安息日運動を起こし、土曜安息日を遵守すべきことを主張した。ノルウェー、フィンランド、スウェーデンなど北欧諸国では、16世紀初頭、宗教改革がもたらされる以前から、土曜安息日を守る人々がいたことが確認されているし、オランダ、フランス、ロシアにも、そうした人々がいたようである。ただし、そうした報告が、ユダヤ人やユダヤ教に改宗したキリスト者たちのことを言っている場合もあるらしく、正確なことは不明と言わねばならない。

ただ、いずれにしても、日曜日をSabbathとする中世以来の一般的な宗教慣習の中で、この宗教改革期に、単純素朴な聖書主義から土曜日をSabbathと見なす者たちがヨーロッパ大陸の各地にいたらしいことは確かである。SabbathとSundayの問題は、決して決着ずみの事柄では

なく、生きて揺れ動く現実の争点だったのである。

(未完)

### 注

- 1) 永田 久『暦と占いの科学』(新潮社, 1982年), 73-74, 79-81頁参照。
- 2) 以下は主にWilly Rordorf, *Sunday: The History of the Day of Rest and Worship in the Earliest Centuries of the Christian Church*. tr. by A. A. K. Graham (London: SCM Press, 1968): 193-215, Samuele Bacchiocchi, *From Sabbath to Sunday: A Historical Investigation of the Rise of Sunday Observance in Early Christianity* (Rome: The Pontifical Gregorian University Press, 1977): 90-131, Walter F. Specht, "Sunday in the New Testament" (*Sabbath in Scripture and History*, [以下SSHと略記] pp.114-129) 等に拠っている。
- 3) 「週の初めの日」というのは、区切りをつけやすいという利点のほかに、当時の支払い日は週の初めだったのではないかとDeissmann等は推測している (Specht, p. 125)。
- 4) *From Sabbath to Sunday*, p. 162の本文や脚注を参照。
- 5) “主の日” という言い方については, K.A. Strand, “The ‘Lords Day’ in the Second Century” (SSH, Appendix F., pp. 346-351) を参照。短い論考であるが、きわめて説得力に富む。日曜日を“主の日”と呼ぶようになった証拠とされる2世紀初頭の三つの文書—『ディダケー』『イグナティオスの、マグネシア人への手紙』『小プリニウスの、トラヤヌス帝への手紙』—が、いずれも週ごとの日曜日に言及しているとは断言できないことを指摘し、信頼できる最初の明確な言及は190年頃のアレクサンドリアのクレメンスであることを確認している。  
なお、ギリシア語の *κυριακή ἡμέρα* が、ラテン語の *Dominica dies* となり、それがロマンス語系の諸言語に残っているわけである (*dimanche, domenica, domingo*などは皆、“主の日”すなわち“日曜日”の意)。Specht, p. 126参照。
- 6) これについてもさまざまな考察があるが, S. Bacchiocchi, *From Sabbath to Sunday*; R. J. Bauckham, “Sabbath and Sunday in the Post-Apostolic Church,” (Carson ed., pp. 251-298); Bacchiocchi, “The Rise of Sunday Observance in Early Christianity” (SSH, pp. 132-150) 等を主として参照した。
- 7) ローマ・グレゴリアン大学での博士論文 “Un esame dei testi Biblici e patristici allo scopo d'accertare il tempo e le cause del sorgere della domenica come giorno del Signore” (1974) に手を入れて英訳したもの。
- 8) Bauckham, pp. 270-273。また特にK. A. Strand, “From Sabbath to Sunday in the Early Christian Church: A Review of Some Recent Literature. Part II: Samuele Bacchiocchi's Reconstruction,” (*Andrews University Seminary Studies* [以下AUSSと略記] 17 [1979]: 85-104) が的確にポイントを突いている。
- 9) Bauckham, pp. 274-275。
- 10) こうした問題点に加えて、重大な弱点として、Strandは、Bacchiocchiが自説の補強として提示した

Easter Sundayの問題をも取り上げている。すなわち、Easter Sundayもまたローマで反ユダヤ感情のもとに生まれたとするBacchiocchiの主張が史実にそぐわないことを、Bacchiocchiと同じ史料を用いつつStrandは明らかにしているのである。(“A Review”, pp. 91-95)

- 11) *From Sabbath to Sunday*, pp. 218-235, 270-302。
- 12) Augustinus, *Epistula* 55. 23. 1 (*From Sabbath to Sunday*, p. 270)。
- 13) Augustinus, *Epistula* 36. 12. 14 (*Ibid*, p. 271)。なお、代表的な大著『神の国』(*De civitate Dei*)の末尾、有名な箇所を、参考までに引いておく—「聖書の表現から知られるように、諸時代を日々として数え、それに従って時代区分をあげるならば、わたしたちの安息は明らかに第七日に求められるであろう。……わたしたちの生きているのは第六の時代であるが、……そのあとのいわば第七日に、神は休むであろう。……この第七日はわたしたちの安息であり、その終わりは夕べではなくて、いわば主の永遠の第八日である。それは、霊のみでなく身体の永遠の安息をも予表するキリストの復活によって聖別された日である」(『神の国』第22巻等30章5。泉治典訳。『アウグスティヌス著作集』等15巻〔教文館、1983年〕379-380頁)。
- 14) K. A. Strand, “The Sabbath and Sunday From the Second Through Fifth Centuries,” (*SSH*, Apperdx B, pp. 323-332)。
- 15) Epistle of Barnabas, chap. 15 (*The Ante-Nicene Fathers* 1 :147)。
- 16) Justin Martyr, *I Apology* 67 (*ANF* 1 :186)。
- 17) *From Sabbath to Sunday*, pp. 232-235参照。
- 18) Socrates Scholasticus, *Ecdesiastical History*: 5. 22 (*Nicene and Post-Nicene Fathers*/2, 2 :132 (Strand, *Ibid*, p. 323))。
- 19) Sozomen, *Ecclesiastical History* 7. 19 (*NPNF*/2, 2 :390 (Strand, *Ibid.*, p. 324))。
- 20) *Apostolic Constitutions*, 7. 23 (*ANF* 7 :469)。
- 21) *Ibid.*, 8 :33 (*ANF* 7 :495)。
- 22) Gregory of Nyssa, *On Reproof* (Migne, *Patrologia graeca*, 46 :309, 310) ; Asterius of Amasea, Homily 5, on Matthew 19 : 3 (*PG* 40 :225, 226), (Strand, *Ibid.*, p. 325)。
- 23) Strand, *Ibid.*, pp. 326-327。
- 24) J. van Goudoever, *Biblical Calendars*, 2nd ed. (Leiden, 1961), p. 167. (Strand, *Ibid.*, p. 327)。
- 25) *Codex Justinianus* 3. 12. 3 (Philip Schaff, *History of the Christian Church*, vol. 3 [5th ed.,1902], p. 380, note 1)。Don F. Neufeld and Julia Neuffer ed., *Seventh-day Adventist Bible Students' Source Book*, (Washington, D. C : Review and Herald Publishing Assn., 1962), p. 999. 以下SBと略記。
- 26) Rordorf, p. 163. Bauckham, p. 281。
- 27) Rordorf, p. 166。
- 28) 政治・社会・宗教と同時に、規則的な休日は経済活動にも益するところ大であったであろう。M.G. Glazebrook, “Sunday”, James Hastings ed., *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol.12 (Edinborgh : T. & T. Clark, 1921), p. 105参照。
- 29) Glazebrook, *Ibid.*
- 30) *Theodosian Code* 11. 7. 13. (*SB*, p. 1001)。

- 31) *Ibid.*, 15. 5. 5 (SB, pp. 1001–1002)。  
 32) *S. Ephraem Syri hymni et sermones*, 1 : 542–544 (Strand, p. 329)。  
 33) Charles Joseph Hefele, *A History of the Christian Councils*, Vol. 2, trans. & ed. by H. N. Oxenham (Edinburgh : T. & T. Clark, 1896), pp. 310, 316 (SB, p. 879)。  
 34) *From Sabbath to Sunday*, pp. 187–198。2世紀から、マルキオン (160年頃没) の頃から、この動きは存在したとBacchiocchiは見る。  
 35) *Ibid.*, p. 197。なお、ここで、ローマの教会と土曜日の断食という点につき、二つのことを補足しておきたい。

一つは、いささか余談めくが、いわゆる「郷に入っては郷に従え」「ローマではローマ人のようにせよ」ということわざは、アウグスティヌスと母モニカが、「ローマでは土曜日に断食していますが、ミラノではしていません。どちらの習慣に従うべきでしょうか」と、アンブロシウスに尋ねたのに対し、アンブロシウスが「私はミラノにいる時はミラノの人たちのようにするが、ローマに行った時にはローマの人たちがするようにする」と答えたことからきていとされる。(Augustine, Letter 54, to Januarius, chap. 2, in Migne, *Parologia Latina* 33. 200, 201 (SB, p. 880))

もう一つ。これは大事なことで、しかも余り注意を払われていないのであるが、いわゆる東西教会の分裂 (1054年) の原因の一つに、実はこの「土曜日の断食」ということがあったのである (R. L. Odom, "The Sabbath in the Great Schism of A. D. 1054," *AUSS* 1 (1963) : 74–80)。

コンスタンティノポリス総主教ミカエル・ケルラリオスははじめ東方の教会が、ローマ教皇はじめ西の教会に宛てた公開書簡 (1053年) には、他の事柄と並んで土曜日の断食が重大な争点として挙げられている。これを強制しようとするローマ教会に、東方の教会は激しく抗議しているのである (PG 120. 835–845 (Odom, p. 74))。同じ頃、コンスタンティノポリスの修道院長Nicetas Stethatosは、ラテン教会を駁する書を著し、聖書からであれ使徒的伝承からであれ、安息日を断食の日とするどんな権限もローマの聖職者たちは持ち合わせていないはずだと断言し、広汎な支持を得る (PL 120. 1011–1022 (Odom, p. 75))。

同年末、教皇レオ九世は長文の手紙をケルラリオスらに書き、自分は使徒ペテロの後継者であって全教会に対する至上権を有しており、自分の言葉は信徒が服従すべき律法であると述べる (PL 143. 745–768 (Odom, *Ibid.*))。

さて翌1054年、レオ九世は枢機卿フンベルトを中心とする使節団をコンスタンティノポリスに派遣して収拾にあたらせるが、東方教会はローマ司教 (教皇) に従うことを肯んぜず、話し合いは決裂して使節団は聖ソフィア寺院の祭壇に破門状を置くに至る (6月)。ところでこの折りに、フンベルトはある文書の中で、教皇シルヴェステル一世の言葉を引いてこう主張している——「主のすべての弟子たちにとって、葬られている主を嘆き悲しんで、安息日には悲嘆があり、一方勝ち誇るユダヤ人たちには喜びがあった。断食している使徒たちは、ただ悲しみにくれていた。それゆえわれわれは、主の葬りのゆえに、悲しむ者たちと共に悲しみ、そして、主の復活のゆえに喜ぼうではないか」 (PL 143. 936–937 (Odom, p. 78))。土曜日の断食はこのように理由づけられていたわけである。

後にケルラリオスは、アンティオキアの総主教に手紙を送って事態を説明し、ついで、安息日に関してこう述べている——「なぜならわれわれは、安息日を主の日と同様にあがめるように、そしてこれを守ってこの日には働かぬよう命じられているからである」と (PG 120. 777–778. (Odom, p. 79))。東方では、この時代においてもなお、主の日と共に安息日が尊ばれていたことをこれは示している。

- ローマ教会がこんなにも執着し励行させようとした安息日の断食は、しかし11世紀末にはゆるみはじめ、代わって、第七日は聖母マリアの崇敬に捧げられるべきとする考えが広まっていく。西方では安息日の断食がすたれていき、東方教会では安息日を尊ぶということがすたれていき、いずれにせよ第七日安息日は特別な日ではなくなっていく (Odom, pp. 79-80)。
- 36) この部分は, Daniel Augsburg, "The Sabbath and Lord's Day During the Middle Ages" (SSH, pp. 190-214) に多くを負っている。なお, R. J. Bauckham, "Sabbath and Sunday in the Medieval Church in the West," (Carson, pp. 299-309) をも参照。
- 37) Augsburg, p. 192.
- 38) *Epist.* 108. 20. (NPNF/2, 6:206 [SB, p. 999])。
- 39) ヘンリー・ベッテンソン編, 島田福安訳, 『キリスト教文書資料集』(聖書図書刊行会, 1962) 189頁。
- 40) *PL*, 77. 1254, 1255 (Augsburger, p. 193)。
- 41) C. Mervyn Maxwell ed., "Collection of Papers for the Class on History of Sabbath and Sunday" (Andrews University, 1976), pp. 452-455.
- 42) *Ibid.* 並びに Augsburg, pp. 193-194.
- 43) *Monumenta Germaniae historica, Conc.* 1. 165. 166 (Augsburger, *Ibid.*, p. 198)。
- 44) Canon 4 (*Mansi* 9:1015 [Augsburger, p. 198])。
- 45) *MGH, Cap.* 1. 11. 12 (Augsburger, p. 198)。
- 46) Winton U. Solberg, *Redeem the Time: The Puritan Sabbath in Early America* (Harvard, 1977), p. 14. Kenneth L. Parker, *The English Sabbath* (Cambridge, 1988), p. 14.
- 47) *MGH, SS.* 1. 569, 633, 643 (Augsburger, pp. 198-199)。
- 48) *MGH, Leges*, 1. 66 (SB, p. 1002)。
- 49) Glazebrook, p. 106.
- 50) *MGH Conc.* 2. 194. 195 (Augsburger, p. 203)。
- 51) Hefele-Leclercq, *Histoire des conciles* (Paris.1907-), 3:287, 288. (Augsburger, p. 203)。
- 52) *PL* 110:76-78 (Augsburger, *Ibid.*)。
- 53) Glazebrook, p. 106.
- 54) Solberg, p. 14. Parker, p. 19.
- 55) Bauckham, *Ibid.*, p. 304.
- 56) ここは特に Augsburg, pp. 205-206; Bauckham, pp. 304-307; Parker, pp. 17-21に拠る。
- 57) Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, 2a2ae, 122, 4 (Blackfriars Edition, 1972, p. 305 [Parker, p. 19])。
- 58) *Ibid.* 2a2ae, 122, 5.
- 59) Gregory I, *Selected Epistles* 13. 1 (NPNF/2. 13. 92, 93 [SB, P. 833])。
- 60) 注の35を参照。
- 61) Augsburg, pp. 208-209.
- 62) *Ibid.*
- 63) この箇所は R. J. Bauckham, "Sabbath and Sunday in the Protestant Tradition" (Carson, ed., pp. 311-341); K. A. Strand. "Sabbath and Sunday in the Reformation Era" (SSH, PP. 215-228); Parker, pp. 23-32等に基づく。

- 64) Bauckham, pp. 312–317; Strand, pp. 215–218; Parker, pp. 23–27.
- 65) 『大教理問答書』福山四郎訳。『ルター著作集』第一集第八巻（聖文舎, 1971年）403–405頁。
- 66) The Augsburg Confession 2. 7. in Philip Schaff, *The Creeds of Christendom* (N. Y. Harper, 1919), 3 : 68, 69 (SB, p. 997)。
- 67) カルヴァン『キリスト教綱要』II. 渡辺信夫訳（新教出版社, 1962年）191–192頁。
- 68) ジャン・カルヴァン, 渡辺信夫編訳『ジュネーブ教会信仰問答—翻訳・解題・釈義・関連資料—』（新地書房, 1989年）48頁。
- 69) 『キリスト教綱要』2. 8. 31. (前掲書194頁)
- 70) 同書 2. 8. 33. (197頁)。
- 71) Strand, p. 217.
- 72) 『天来の預言者らを駁す, 聖像と sacrament について』, 石本岩根訳。『ルター著作集』第一集第六巻（聖文舎, 1963年）75頁。
- 73) Strand, pp. 217–218.
- 74) ここは Daniel Augsburg, “Sunday in the Pre-Reformation Disputations in French Switzerland”, *AUSS* 14 (1976) : 265–277に拠る。
- 75) ジュネーブ大学図書館にある記録文書, Claude Roset : *Letres certaines daucuns grandz troubles et tumultes, advenuz a Geneve, avec la disputation faicte l’an 1534. Par monsieur nostre Maistre frere Guy Furbiti, de l’ordre de S. Dominicque. du couvent des freres prescheurs de Montmellian, alencontre daucuns quon appelle predicantz qui estoyent avec les Ambassadeurs de sa Seigneurie de Berne.* に基づく [Augsburger, p. 268ff.]。
- 76) *Un opusculé inédit de Farel*, ed. Theophile Dufour (Geneva, 1885) [Augsburger, p. 271 ff.]。
- 77) *Les Actes de la Dispute de Lausanne 1536*, ed. Arthur Piaget, vol.6 : *Mémoires de l’Université de Neuchatel* (Neuchatel, 1928)。 [Augsburger, p. 273ff.]。
- 78) Augsburg, p. 277.
- 79) Gerhard F. Hasel, “Sabbatarian Anabaptists of the Sixteenth Century,” Part I, *AUSS* V (July, 1967) : 101–121, Part II, *AUSS* VI (Jan.1968) : 19–28.
- 80) *Ibid.*, I : 115.
- 81) A. J. F. Zieglschmid, ed. *Die älteste Chronik der Hutterischen Brüder* (Philadelphia, 1943), pp. 259, 260, 266. (Hasel, I : 114–115)。
- 82) S. D. Hartranft and E. E. Johnson, eds., *Corpus Schwenckfeldianorum* (Norristown, Penn., 1907–, 以下CSと略記), IV, (Hasel, I : 112ff)。
- 83) CS, IV, 479, 508, 509 (Hasel, I : 118)。
- 84) CS, IV, 458, 491 (Hasel, I : 119)。
- 85) CS, IV, 504, 502 (Hasel, I : 120)。
- 86) CS, IV, 513 (Hasel, I : 121)。
- 87) Valentine Crautwald, *Bericht und anzeigen/wie gar one Kunst und guotten verstandt /andreas Fischer. vom Sabbat geschrieben/auch Das er Inen wider alles rechten sucht/*

*noch als nöttig Im Christenthum zuhalten Hab mögen schützen* (1532). [Hasel, II : 20ff.]。

88) *Ibid.*, p. 40 (Hasel, II : 23)。

89) *Ibid.*

90) *Ibid.*, p. 41 (Hasel, II : 26)。

91) *Ibid.*, p. 42 (Hasel, II : 26)。

92) ここはStrand, pp. 222-225に拠る。

93) Constantino, *Suma de Doctrina Christiana*より (Strand, p. 223)。